

**ICT でつながる輪**  
**～ICT を活用して、教育的効果を上げる～**

大阪市立西淡路小学校 川島 愛

**1. 研究主題設定の理由**

平成28年度からの2年間で指導者・児童ともに様々なICT活用のためのスキルを身につけることができたが、次第にICTを活用することばかりに目が行きがちとなり、「何のために」「誰に向けて」調べたり表現したりしているのか、十分に意識できているかどうか曖昧となってしまう場面も多くなった。

そこで、ICT活用の意味をもう一度見つめ直し、効率的に進めるのではなく、児童のよりよい成長に向け、「主体的・対話的で深い学び」の手段の一つとしてICTを効果的に活用すること、互いの意見を尊重しコミュニケーションを大切にできる学び合う集団育成をすることを大切にすることを目標に、「ICTでつながる輪～ICT機器を活用して、教育的効果を上げる」という研究主題の設定に至った。

**2. 研究のめざすもの**

「人とつながり、全力で取り組み、憧れをもって未来を拓く子ども」の育成には、誰もが安心でき、共に楽しく学び、互いに理解し助け合える学習集団が必要である。そこで、学び合う児童の、よりよい人間関係の構築のためにICTを活用したいと考えた。「自信がなく一人ではちょっと難しそうなことも誰かがどこかで支えてくれるから頑張ることができる。友だちがいるからこそ前向きに取り組むことができる」と、つながりをしっかり体感できる研究にするため、4つの輪を設定した。

**【ICTでつながる4つの輪】**

**① “友だちとつながる”**

自分や友だちの見方・考え方を伝え合うことで互いのよさを知り、感性や考え方を理解し大切にしようとする人間性の育成をはかる。また、異なる文化や考え方を認め合い、深い学びや豊かな感性を共に育てられるようにする。

**② “家庭とつながる”**

学校と家庭が連携し「がんばってるね」「できるようになったね」と児童の頑張りを温かく励ますことで児童の学習意欲の向上につなげる。またLTE回線を利用し、ドリル型学習、動画視聴など学校での学習を活かした課題を家庭でも取り組む。

**③ “地域社会とつながる”**

児童が家庭や学校の枠を超え、視野を広げることで様々な方の思いに気づき、考えることで未来の担い手として、自分自身の将来への展望を持つことにつなげる。

**④ “自分とつながる”**

自分の考えをまとめたり、よりよい方法を判断し表現を工夫したりする。また、持ち帰り学習を行い、自分の目標に合わせた学習に取り組み、家庭学習の定着をはかる。

これらのつながりを意識した実践を行い、自尊感情や自己肯定感を高め、安心した学習集団をつくりたい。ICT活用では、個人のスキル向上とならないよう「興味関心を引き出すため」「共有の場として」「調査活動として」「自分の表現として」など、必要な場面で扱えるよう工夫した授業づくりを行い、長期的な学力向上につなげていきたいと考えた。

### 3. 研究の成果

低学年の児童にとってタブレットパソコンは「使えることだけで嬉しい」意欲が湧く魅力的な学習道具であり、写真・動画を撮影し、自分の気づきを表現するという技能が身についた。指導者が明確に目標を示すことで、児童の発見に意味を見出し、友だちとの違いに気づき、自信を持って発表する主体的な姿を育てることができた。自分の表現を聞いてもらいたい・見てもらいたいという気持ちは、同時に友だちの表現も聞きたい・見たいという気持ちを育むことにつながることができたと考える。

高学年の児童にとってタブレットパソコンは、今や学習を支える道具の一つとなっている。活動の目標達成のためのツールの一つとして活用は大きい。膨大な情報の中から指導者がねらいに沿ったものを準備し、児童はそこから自分にとって必要な情報だけをしっかり見極め活用しながら、自分の考えをまとめることができた。友だちとの対話や学級での共有を通し、新たな気づきを得、さらに考えを深めるなど、確かな学力の定着へと結びつけることができたと考える。

また、今年は中学年での持ち帰り学習に力を注いだ。LTE 回線を使った取り組みは、学校と児童だけでなく家庭の支えもあり、共に出来た喜びを分かち合う機会となった。学校が今身に着けたい力を明確にし、家庭へ発信することで、保護者が家庭でもその頑張りを認め、応援してくれるようになった。頑張っている過程を知ってもらえる安心感、できるようになったことをほめてもらえる満足感、自分でも「できた」と思える実感こそが、児童の成長につながったと考える。

### 4. 今後への展望

相手とつながり合うコミュニケーションの楽しさを味わう実践を行ってきたが、コミュニケーション能力（話す力・聞く力）の育成については、経年調査の結果でも大阪市平均を下回っており、今後への課題である。

視覚支援、課題の焦点化・共有化の速さは ICT の良さであるが、ICT が便利であるがゆえに児童の発信力を阻害してしまっているケースもある。児童が自分たちの世界から社会へと輪を広げていくためには、語彙力を育成する必要がある。全ての教科で指導者がこのことを重視し、児童の言葉を言い換えたり置き換えたりしながら、適切な表現でつなぎ言語能力を向上させることが必要である。

また、「読む」「書く」活動に対し苦手意識の強い本校の児童にとって、実際に文章を声に出して読んだり、漢字・計算の反復練習、熟語を使った短文作成したりするなど、ICT だけに頼らない基礎的基本的な力を定着させる必要がある。

ICT の良さは、何度でもやり直しが可能で、誰もが臆することなく取り組むことができる場所である。しかし、使い方を間違えると児童自ら思考し、課題を解決する力が伸びにくいこともある。簡単で便利な ICT を効果的に活用しながらも、新たな気づきを得て、自分の考えを深め表現し全体場で共有するなど、児童の学びを醸成させる時間をしっかりとることが必要である。

これらの課題をふまえ、今後は、児童が自分の目標に向かって試行錯誤を繰り返し、どのようにすれば達成できるのか論理的に考えていく力を育む授業を考えていきたい。全教科にわたって課題である言語能力・思考力の育成を大切にし、自分の目標に向かって必要な場面で ICT を効果的に利用していきたいと考える。